

# 地域のストレングスに基づいた就労支援のデザイン

—カフェHのエスノグラフィー—

海老田大五朗<sup>1)</sup>・野崎 智仁<sup>2)</sup>

1) 新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科

2) 国際医療福祉大学保健医療学部作業療法学科

## Design of Job Assistance Based on Community Strength

—Ethnography of Café H—

Daigoro Ebita<sup>1)</sup>, Tomohito Nozaki<sup>2)</sup>

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY DEPARTMENT OF CLINICAL PSYCHOLOGY

2) INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE SCHOOL OF HEALTH SCIENCE DEPARTMENT OF OCCUPATIONAL THERAPY

### 要旨

本研究では、地域のストレングスを生かして就労支援を行う精神障害者就労支援施設、カフェHにおける就労支援実践やそのデザインを記述する。とりわけ、「地域のストレングスを活かすこととはどのような実践がなされることか?」を検討した。その結果、K駅近辺在住のボランティア（≒ストレングス）を最大限に活用することは、NPO法人が運営するカフェとして、経済面で最適化されることになることが明らかになった。本研究は、「ストレングスとは何か」と研究者の独断的な定義を避け、精神障害者に何らかのよきものがもたらされるであろうという支援実践者の見通しから遡及的に見出された、支援のデザインを記述する試みである。

### キーワード

地域のストレングス、就労支援、デザイン、カフェ、エスノグラフィー

### Abstract

This study describes the design and practice of job assistance at café H. Job assistance is based on community strength and assists mentally-disturbed individuals who want jobs. Specifically, we considered how job assistance is utilized to support these individuals. We found that to optimize the use of the many volunteers who live in the K station community is to optimize for nonprofit organization to manage café H on the economic front. In this study, we avoid absolutely defining strength. We attempt to describe the design that supports the available mentally-disturbed individuals who want jobs, which generates something good for them.

### Key words

Community Strength, Job Assistance, Design, Café, Ethnography

## I はじめに

### 1. 「ストレングス」をどのように考察するか？

精神障害者の支援の転換点としてしばしば触れられるのが、ストレングスモデルの発見である。Saleebey, D.<sup>1)</sup>が、「私たちの文化や支援専門家には、人の状態を理解する際に、個人・家族・地域社会の病理、欠陥、問題、異常、犠牲および障害に着目するアプローチが染み込んでいる。この事実を認識することが、ストレングスを一層重視した実践へと転換させる推進力の一つとなる」と述べ、人びとの弱さにのみ注目する支援から人びとの強さ（ストレングス）に注目する支援へと、支援実践の転換を促して以降、障害者福祉や地域福祉においても、ストレングスを活かした支援の重要性が指摘されている。たしかに障害者とは何らかの困難をもつ人たちの総称であり、その困難だけに着目したところで困難が困難でなくなるわけではない。何らかの困難をもつ者たちが地域で自立して生きていくためには、その困難を補うための強さが必要なのは当然であるし、その強みを活かした支援をすることで地域での自立が見込めるようになるのは合理であろう。このような、支援における着目点の転換を促すストレングスモデルの理念は、穏当な主張といってよいだろう。

だが、ストレングスモデルを調査研究や実践において使用しようとするとき、避けて通れないのがストレングスの定義、「ストレングスとは何か」という問題である。「ストレングスとは何か」が確定しない限り、ストレングスモデルを使用することはできない。論理的に言って「ストレングスの定義」は「ストレングスモデルの使用」に先行する。しかしながら「ストレングスモデル」は、その使用が検討されるときに、少し奇妙な状況を生み出している。小林ら<sup>2)</sup>の『保育者のため

の相談演習』というテキストには、次のような事例が紹介されている。ある支援すべき母子家庭があり、この母子家庭の課題とは、解雇直前である母親の資格取得と再就労であった。その相談にあたった担当保育士が「母子家族という強みを生かして、市（町・村）の母子自立支援員に応援を求め」（強調は引用者らによる）という事例である。テキストにはストレングスの使用がこの事例の要点であるという説明もある。紹介された事例は、市区町村の母子自立支援員にこの母子家族をつないだことによって、母親の資格取得と就労が成し遂げられるという話になっている。

さて、この事例は母子家族がもつて母親の就労が脅かされるという物語になっており、一般的に言っても母子家族という事実は強みというよりむしろ弱みとして捉えられる。実際に母子家族を支援する法律が維持されるのは、母子家族を弱みとして立法機関が捉えているからに他ならない。したがってこの事例において「ストレングス概念が乱用されている」と指摘することはたやすい。しかしながら、この事例を紹介した小林らにとっても、この事例に関係する母子家族にとっても、この母子家族を支援した保育士にとっても重要なことは、母子家庭がストレングスの定義に適合するか否かではない。重要なのは支援者が介入して母子自立支援員という、母子家族支援のための社会資源につないだ支援実践そのものであり、このような支援員につながることは、就労を脅かされている母親の再就労へと導かれるであろうという、支援実践での見通しである。つまり、支援実践において最重要なのは、ストレングスの定義でもなければストレングスモデルの使用でもない。何がストレングスであるかを特定することでもない。支援の手がかりとは、精神障害者本人に何らかのよきものがもたらされるであろうという見通しから遡及的に見出されたものである。その見通しを立たせることとその見通し

の精度が重要であり、その見通しを与えてくれる社会資源であれば、それが一般に強みと思われるものでなくてもよいのである。

## 2. 就労支援施設がカフェであることの合理性とは何か？

他方、近年の就労支援施設はカフェを併設し、接客業などの職業訓練の場として地域に開かれた場を設置しているところが多く見られるようになった。しかしながら、こうしたカフェを就労支援施設に併設したからといって、直ちに就労移行支援がうまくいくわけではない。たとえば岡<sup>3)</sup>によれば、ある障害者を多く雇用するパン屋が成功したので、他の就労支援事業書でもベーカリーカフェを開設したが、多くはうまくいかなかったことを指摘している。精神障害者が働けるようになるためには、ひいては福祉的就労ではなく一般企業で働くためには、他所での実践を真似るだけではうまくいかず、利用者や相談員、就労支援施設のある地域に最適化されたいくつもの創意工夫や微調整が必要となる。本研究の調査研究対象であるカフェH（仮名）は、1999年にNPO法人の認証を受けたNFが運営母体となっている。カフェHは、働きながら社会で自立するために必要な技術・能力を習得する機会を提供すること、病気とつきあひながら、本人が無理せず安心して過ごせる場を提供すること、喫茶店として地域住民、一般の方に身近に利用してもらい、地域社会の精神障害者に対する理解を深めていくことを大きな目的として設立されている。

## 3. 本研究の目的と方向性

本研究は、Rapp, C. A. & Goscha, R. J.<sup>4)</sup>に倣い、「熱望」「能力」「自信」を数値化してストレングスモデルの数式を使用する研究ではない。また、ストレングスの定義を行い、ストレングスの特定や使用から成功事例を報告するものでもない。本研究では、「支援の手がかりとなりうるような地域のストレングス」を生かして就労支援を行う障害者就労支

援施設のデザインや、そのデザインによってもたらされる支援実践を記述する。本調査報告の目的は、「利用者や地域のストレングスに着目することで高い就労移行率をほこるカフェH」において、「地域のストレングスを活かしたカフェがどのようにデザインされているか？」を明らかにすることである。そのサブクエスションとして「地域のストレングスを活かすこととはどのような実践がなされることか？」という問いのもとで、その支援実践を記述する。最後に、精神障害を抱えた利用者たちの就労移行支援、とくに利用者や地域のストレングスを生かした支援の内実を記述するような調査研究と、ストレングスモデルの関係を考察する。

## II 方法

本研究では、ストレングスモデルの「人びとの弱さにのみ注目する支援から人びとの強さ（ストレングス）に注目する支援へ」という支援実践の着目点の転換を尊重しつつ、支援実践そのものを詳細に記述する。このような研究方針は、Randall, D. ら<sup>5)</sup>やCrabtree, A. ら<sup>6)</sup>が提唱する、デザインの検討を中心にそえた、エスノメソドロジー<sup>7)</sup>に特徴付けられたエスノグラフィ的調査研究といってよいかもしれない。本研究では、フィールドワークによる観察やインタビューを駆使することによって、地域のストレングスを活かしたカフェの就労支援実践、とりわけ地域のストレングスを生かした就労支援、内外装のデザインやカフェHに置かれている小物のデザイン、カフェHのレシピのデザインを明らかにする。

本研究における最大の特徴の1つは、研究者である海老田と支援実践者であった野崎との共同研究という形をとることである。野崎はカフェHの元責任者であり、作業療法士であり、本調査のインフォーマントでもある。

本報告は、この2名のコラボレートによってなされた研究である。したがって、本研究では海老田が野崎にインタビューによって引き出した語りも、あるいは野崎から海老田に対してなされた説明も、原則的にはそのまま地の文として取り込んでいる。

本調査研究においては、新潟青陵大学の調査研究に関する倫理審査を受け、承認を得ている（承諾番号：2015009号）。

### Ⅲ 対象

本研究の調査研究対象となるカフェHは、精神障害を抱えた利用者が一般企業に移行するために設けられた、職業訓練場としてのカフェである。就労移行支援<sup>8)</sup>とは、「一般就労等を希望し、知識・能力の向上、実習、職場探し等を通じ、適性に合った職場への就労等が見込まれる障害者（65歳未満の者）」のうち、「企業等への就労を希望する者」を対象にした支援である。就労移行支援施設でのサービスは、「一般就労等への移行に向けて、事業所内や企業における作業や実習、適性に合った職場探し、就労後の職場定着のための支援等を実施」することで、「通所によるサービスを原則としつつ、個別支援計画の進捗状況に応じ、職場訪問等によるサービスを組み合わせ」ることが認められており、「利用者ごとに、標準期間（24ヶ月）内で利用期間を設定」される。2015（平成27）年2月の段階で、日本全国には2,952の事業所があり、28,637名の利用者がいる。ここでは就労移行支援の成果として、「1年間に何%の利用者が一般企業に移行できたか」という達成率が、目標達成としての一つの指標になる。精神障害者の就労移行支援における一般就労の移行率の全国平均が例年15%程度なのに対し、昨年のカフェHの一般移行率は約80%以上と、全国平均に比べ5倍以上のパフォーマンスを達成している。しかし、野崎によれば「大事

なのは数字の達成ではない。数字に表れない支援の方がむしろ大切」なのだ。

カフェHに入店する一般客は、カフェHが就労支援施設であることを知らずに入り、そのまま気づかずに店を後にしたりすることが少なくない。カフェHに入店する一般客にとって、カフェHはあくまで飲食を楽しむカフェであり、就労支援施設ではない。注目されるべきはまさにこの点にある。要は、説明されなければ気づかれない程度に、「雰囲気を楽しむカフェ」であることと「精神障害者の就労支援施設」が両立しているのである。

### Ⅳ 実践の記述

#### 1 地域のストレングスを生かした就労支援—実習に協力していただける企業の確保—

カフェHはK駅から徒歩5分の商業地域に位置している。カフェHの目の前の道路は道幅が8メートル程度であり、向かいには寿司屋がある。ただし商業地域ではあるものの、住宅に隣接しており、人通りや車もそれほどたくさんの往来があるわけではない。K駅前には、以前は在来線の乗り継ぎ駅として栄えたものの、近年は隣に新幹線停車駅ができたこともあり、年々さびしくなっている。コミュニティに入り込み、かつコミュニティに開かれた就労移行支援とは、コミュニティの課題を共有することでもある。たとえば駅前活性化、労働力の減少などコミュニティの課題は、当事者である精神障害者や支援者であるカフェHの課題でもある。コミュニティの損益は、自分たちの損益に結びつく。

このような商業地区の過疎化が進むなか、K駅前活性化事業にカフェHの職員や利用する当事者が一緒になって参加している。たとえば、K駅前の清掃や花壇の手入れをしたり、K駅前の町興しイベントを中心にカフェHの出店を出すような試みをしている。この出店こそが地域のストレングスを生かすための最

初の仕掛けである。駅前に出店することは、カフェの売り上げを伸ばすことだけが目的ではない。出店したときに隣接する一般の商店との関係を作ることも目的となっている。一般の商店との関係を作ることで、その商店の主が人的資源に関するニーズを引き出すことが可能になる。つまり「繁忙期はいつで、この時期は人手がほしい（が、普段継続的に人を雇用する余裕はない）」などの人的資源に関するニーズを引き出すことで、「カフェHの利用者を実習生として使ってみませんか」という提案をするのだ。また、出店を出すことで、仮に精神障害者であったとしても、ちょっとした配慮があれば十分に働くことは可能であることを示すことができる。たとえば販売員などの仕事を任せ、その任された仕事を遂行させる。隣接する商店との関係を作っていくことで、人的資源に関するニーズを引き出し、利用者たちの能力を示すことによって、就労支援のための実習先を確保しているのである。

現在、カフェHの就労支援のための実習先は、製麺所や米問屋、他の洋菓子店の補助、宿泊地などの清掃業、酪農業、乗馬場でのサラブレッド飼育、介護施設での介護補助や事務業務など、多岐に渡っている。

実際に実習が正規採用につながることもある。こうした一般企業での実習先を確保したり、実習をコーディネートすることは、就労移行支援における最重要業務の一つである。また、実習協力先を確保することは、就労移行支援実践における最も難しい業務の一つでもある。実際、カフェHの高い移行率を支える最大の要因は、実習中心の支援ができるということに尽きる。就労支援施設の職員は、実習先を確保できた時点で正規採用に大幅に近づいたという見通しを

立てている。

一般企業での実習中心の就労移行支援が可能なのは、カフェH自体が常に地域や一般客に解放された環境であり、かつカフェHが恒常的に実習先の確保に努めているためであろう。カフェHのある地域や、地域に根ざす一般企業やその企業に勤めている人びと、一般客を就労支援のための社会資源として徹底的に活用する支援のデザインになっている。

## 2. 内外装のデザインやカフェHに置かれているマテリアルのデザイン

### 1) 建物、内装、テーブル、椅子

カフェHは中古の一軒家をリフォーム（写真1、2参照）して作られている。はなれにはカフェHとは別に活動室や相談室が設けられている。決して新しい建物とは呼べないのだが、その骨組みや間取りなどの基本構造以外のリフォームは基本的に自分たちでなされている。客席は完全屋内にテーブル席が2セット、カウンター席が約10席分ある。半屋内であるテラス席（写真2、3参照）にはテーブル席が7セットある。テラス席は庭に隣接しており、扉をあけるとすぐに庭に出ることができる。屋外である庭にもテーブルが1セット（写真4



写真1 カフェHの入口



写真2 カフェHのテラス席



写真3 テラス席のテーブル



写真4 庭にある手作りのテーブル

参照)あり、天気の良い日はそこでも食事をとることができる。

興味深いのはカフェHで使用されているテーブルや椅子である。特にテラス席で使用されているテーブルや椅子(写真3参照)がわかりやすい。よく見るとテーブルも椅子も不揃いであり、一部の物は角が欠けていたり、椅子やテーブルの脚が錆びているなど、軽微な破損もある。たとえば写真4のテーブルは、捨ててあった板に修復を加え、精神障害者である利用者と常勤スタッフが協働して作成されたものである。よく見ると一枚板が割れているテーブルもあり、その割れた板を修復して利用している。そのようにして入手し、自分たちで手直しをしたテーブルや椅子が並べられている。中には廃校になった学校から入手した椅子などもある。いくら手直しをしたからといって、こうした不揃いで軽微であれ錆のあるようなテーブルや椅子を飲食店で並べるのは、適切ではないと思われるかもしれない。しかしながら、これが不思議なほどテラス席のスペースと調和が取れていて、注意深く見なければ椅子やテーブルが不揃いであることに気づくことすらない。

このようなテラス席におけるテーブルや椅子の配置には、ひとつの考えが反映されている。一部の破損などがあるからといって、ただちに不要なものとは見なさず、空間配置のデザインや部分的な修正などの創意工夫によって、そのような古びたものや不揃いのものを、その空間全体の中で調和させるというものだ。端的に言えば、カフェHで使用されているテーブルや椅子は、「ある種の欠損があったとしてもデザインによって心地よい空間を生み出す資源」として再活用されている。

あるいは写真5で確認できる天井の布を見てみよう。この布は、テラス席の天井に貼られているものなのだが、テラス席の屋

根はよく見るとわかるとおり、透明でプラスチック素材で作成さ



写真5 天井の布

れている。だが、夏になると日照によってテラス席がすごい高温になってしまうというトラブルが生じた。そこで対策として天井板を貼るというアイデアも出されたのだが、せっかくの明るさや開放感が犠牲になってしまう。そのような悩みを抱えていたとき、ある地域の飲食店経営者から「布を張るとおしゃれでよい」という助言を受けた。そこでこのようなベージュがかった白色の布を張ることで、明るさや開放感を損なうことなく、熱を導いてしまう紫外線などをカットすることに成功したという。

ここで取られた対応策についても少しの考察をはさんでみたい。透明のプラスチック素材によってテラス席が高温になってしまうのであれば、「日照をシャットアウトする」ということが第一の選択肢として挙げられそうであるし、実際に挙げられた。しかしながら、その選択をしてしまうと、確かに熱はシャットアウトできるものの「明るさや開放感が損なわれてしまう」。そこで出された代案が布の使用である。この布を使用することで、余計な熱をこもらせてしまう紫外線をカットし、なおかつ明るさや開放感を犠牲にせず、さらには美的にも優れたインターフェイスを生み出すことに成功している。つまり、二者択一的な選択をするのではなく、トラブルを解決しつつ、美的なものを犠牲にせず、むしろトラブルの対応策と美的センスを両立させるような選択がなされている。「二者択一的な選択」ではなく「二者両立を志向する」方策は、「取捨選択を志向する」のではなく「最適の選択を志向する」という点にお

いて、商業的な意味でのデザインに限定されない、「技術上のディテール」、「機知や良識」、「創意工夫」という、従来の意味での「デザイン」<sup>9-10)</sup> (Rawsthorn, A. (2013=2013:16-49)、海老田他 (2015)を参照のこと) といえるだろう。つまり、カフェHにあるマテリアルの1つ1つがこのような「デザイン」であふれているのだ。

## 2) 小物、装飾

カフェHにおいて、特に目を引くのが豊富な小物や装飾品である。たとえば写真6にあるような観葉植物は、自然豊かなK駅地区のストレングスが活かされていると言えよう。これらの植物は、購入されたものではない。カフェの支援者の言葉を借りるならば、「そこらへん（主に庭など）に生えているものをブチッと抜いてきて活けるだけ」である。こうした豊富な観葉植物の設置は、庭などの屋外との連続性ないし調和をテラス席にもたらしている。写真7で

確認できる「ひざ掛け」は、ボランティアのある女性の発案によって置かれるようになったものである。その布の色や素材の質感が考慮され、ただ置いてあるだけでも飾りとなり、かつひざ掛け本来の機能としても発揮する製品



写真6 テーブル上の小物



写真7 カフェHに置いてあるひざ掛け

を作成している。こうした「ひざ掛け」のアイデアも、オブジェのアイデアと同様にボランティアによってもたらされている。

## 3. カフェHのレシピのデザイン

カフェHで提供される飲食物(写真8参照)について見てみよう。相談支援専門員などの

専門職者は就労支援の専門職者であって、飲食業やカフェ運営の専門職者ではない。



写真8 ホットサンド

カフェの支援

者の言葉を借りれば、「自分たちの力だけではたいしたものはお客様に提供できない」のだ。しかし、だからといってカフェHでは粗末な食事を提供しているわけではない。実は、提供する料理のレシピなどについては自分たちで生み出すのではなく、地域のボランティアから提供していただいているのである。地域には、カレーライスやホットサンドなどの料理やケーキなどのスイーツを作成できる人びとがたくさん存在している。実際に飲食業者として働いていたがすでにリタイアされた人もいる。こうした地域に根ざすボランティアを活用することで、言ってみれば飲食業専門職者に負けない商品の提供が可能になっている。地域のボランティアこそ地域のストレングスである。

こうした地域のボランティアを活用することでもたらされる効果は、「より良い商品を提供できる」、「商品開発のための経費を抑えることができる」といった商品と金銭の直接交換に関わるものだけではない。このような商品開発を支援したボランティアが、友人や知人などを伴って、カフェHにお客として来店する仕掛けにもなっている。つまり、商品開発に地域のボランティアを活用することで、より継続的に来店する一般客の確保にもつながっている。一般客が増えることによっても

たらされる効果は、経済経営的な金銭的利益だけではない。これは精神障害者と健常である一般客の接点が増えることを意味している。つまりは、文字通り人と人とのつながりを増やすことにもなる。

メニュー表（写真9）にある値段設定にも注目してみよう。主なメニューとして、コーヒー一杯が500円弱、カレーとドリンクのセットが約1000円となっている。運営主体が気をつけていることは、「地域の同業他店に迷惑をかけるような値段設定をしてはならない」ということである。運営主体はNPO法人であるので、商品の値段を「商品材料の仕入れ値 + a」程度に設定することも可能である。しかしながら、このような値段設定をしてしまうと、地域のお客を全て回収してしまい、かつ、さばききれないほどの客を招き入れてしまう恐れがある。逆に値段を高価に設定してしまうと、一般客が全く寄り付かなくなる。つまり、カフェHにおける商品の値段は、一定の集客が見込め、かつ「地域の同業他店に迷惑をかけるような値段設定をしてはならない」ということを1つの基準に設定されている。



写真9 メニュー表

このようなレシピの作成や値段設定にしてみても、地域のボランティアを頼ったり、地域の同業他店に迷惑がかからないといった工夫や調整、つまりデザインがなされている。

## V 結論

### 1. カフェHにおける実践についての考察

NPO法人が運営主体である以上、カフェを運営する費用には限界がある。営利目的でカフェを運営するわけではなく、精神障害者の就労支援の一環としてのカフェ運営である。

したがって、内外装のデザイン、小物のデザイン、レシピ開発などに対する予算は相当限られたものになる。つまり、地域のボランティア（≡ストレングス）を最大限に活用することは、NPO法人が運営するカフェとして、経済面で最適化されることになる。

他方で、支援員などの専門職者は就労支援の専門職者であって、カフェ運営の専門職者ではない。そこで、内外装のデザイン、小物、レシピを考えることが好きなボランティアを募り、参加していただいたボランティアにはそれぞれの得意な分野（≡ストレングス）でのアイデアを提供してもらう。ボランティアは基本的に自分の好きなこと、趣味の延長で手伝いをすることになるので、義務的な力に拘束されているわけではなく、この意味において負荷の少ないボランティアの組織化になっている。ここに一つのデザインが見てとれる。募集するボランティアとボランティアが担う作業のマッチングが双方の嗜好に最適化されているのだ。ボランティアの作業や業務はボランティアへの義務的負荷が最小化される工夫として、ボランティアの得意なこと、好きなことが活かされるように調整されており、なおかつカフェの内外装・小物・レシピが支援員だけでは提供できないサービスを、経済的な投資をすることなく提供可能にしている。

カフェHにおいて、このような最適化の志向は、ボランティアの組織化に関わることだけではない。ここまで記述してきたテラス席のテーブルや椅子のデザインや天井の布のデザイン、レシピのデザインのように、カフェHでは、あらゆるトラブルが二者択一的な選択ではなく、たとえ何らかのトラブルがあったとしても、最適化される方向でデザインされる。こうしたデザイン＝最適化志向は、実はカフェHにおける精神障害者の就労支援の方法論そのものなのだ。精神障害者の困難だけに注目してしまえば、一般企業での就労を



諦めざるを得ない現実がある。しかしながら精神障害者本人のできることや地域のストレングスに目を向け、そのストレングスを活用した精神障害者の就労が、一般企業のニーズと調和されるようにデザインされれば、たとえ何らかの困難があったとしても、精神障害者の一般就労は可能になる。

地域のストレングスを活かしたカフェHは、文字通り地域の人びとの集いの場になっている。就労支援事業所とは認識せず、一般のカフェとして来店する客が多い。実はこのこと自体が、精神障害者への偏見を取り除く地域への啓蒙活動にもなっており、週末や祝日にはこのカフェで講演会、ライブ活動、ステンドグラス作成のためのワークショップ（写真10参照）などのイベントも実施されている。K駅前など地域でのイベントがあればカフェHも出店し、隣接する他店との交流を深め、就労の機会を得ている。カフェHは精神障害者の就労支援のための、地域の拠点として機能している。精神障害者の就労移行支援施設と雰囲気を楽しむカフェが両立しているのである。



写真10 ステンドグラス

## 2. スtrenグスモデルと本研究の関係についての考察ー地域の力を生かすデザインー

最後に、本研究とストレングスモデルとの関係について考察し、本研究のまとめとする。NPO法人NFでは、地域住民のストレングスを様々な場面で活用しており、その巻き込み方も対応する職員によって多様である。地域住民への依頼は、事業所運営の中で生まれる細かな困りごとに対するものが多く、具体的には、カレーのレシピ作成、店内に置く本の

選別、喫茶店でのイベント企画、焼き菓子の販路、訓練実習の確保などが挙げられる。

ストレングスモデルを調査研究において使用しようとするとき、「ストレングスの定義」は研究者が定義すればよいというものでもない。というのも、研究者が定義する前に、そもそも就労支援実践者がストレングス概念を使用していなければ、あるいは就労支援実践者が「ストレングスとは何か」をわかっているなければ、それは「ストレングスを生かした実践」でも何でもない。本研究は「ストレングスとは何か」と研究者の独断的な定義を避け、精神障害者本人に何らかのよきものもたらされるであろうという支援実践者の見通しから遡及的に見出された、支援の手がかりになるものを記述する試みである。本研究が目指したのは、利用者や地域のストレングスに着目することで高い就労移行率をほこるカフェHで、実際になされている就労支援に見通しを与えるような実践の記述であり、カフェHの支援実践のなかに埋め込まれた説明可能なデザインの記述である。

## 謝辞

本研究は、JSPS科学研究費補助金（平成27年度 若手研究（B）；課題番号15K17229）の助成を受けた研究成果の一部である。また、本研究はクローズドな研究会である社会言語研究会にてピアレビューを受け、たいへん有益な示唆を得た。当日研究会に参加いただいた友人たちに感謝申し上げる。

## 文献

- 1) Saleebey D. (ed.). Strengths Perspective in Social Work Practice. New York : Longman ; 1996.
- 2) 小林育子, 小館静枝, 日高洋子. 保育者のための相談援助. 38.東京 : 萌文書林 ;

- 2011.
- 3) 岡耕平,「障害者雇用」って本当に必要なの?. 中邑賢龍・福島智編. バリアフリー・コンフリクト: 争われる身体と共生のゆくえ. 92.東京: 東京大学出版会; 2012.
  - 4) Rapp CA, Goscha RJ, 田中英樹. ストレングスモデル第3版. 東京: 金剛出版; 2014.
  - 5) Randall D,Harper R,Rouncefield M. Fieldwork for Design. London: Springer; 2010.
  - 6) Crabtree A,Rouncefield M,Tolmie P. Doing Design Ethnography. London: Springer; 2012.
  - 7) Garfinkel H.Studies in Ethnomethodology. New Jersey: Prentice-Hall; 1967.
  - 8) 厚生労働省. 障害者の就労支援について. 〈[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000091254.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000091254.pdf)〉. 2015年11月30日.
  - 9) Rawsthorn A. 石原薫. HELLO WOLRD. 東京: フィルムアート社; 2013.
  - 10) 海老田大五朗, 藤瀬竜子, 佐藤貴洋. 障害者の労働はどのように「デザイン」されているか?—知的障害者の一般就労を可能にした方法の記述—. 保健医療社会学論集. 2015; 25 (2): 52-62.